

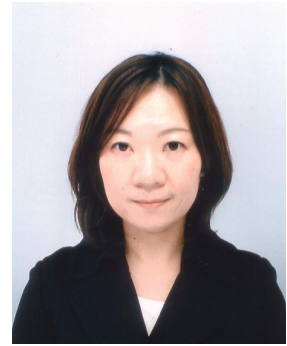
社会福祉士国家試験における心理学

日本大学文理学部心理学科助教

北村世都 (きたむら せつ)

Profile — 北村世都

1999年、日本大学文理学部心理学科卒業。物忘れ外来、心療内科クリニック等で臨床心理士として勤務しながら、2003年、日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科にて修士(社会福祉学)、2007年日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程にて博士(心理学)。2010年から現職。専門は老年心理学、臨床心理学。主な著書は、『エイジング心理学ハンドブック』(共訳、北大路書房)、『最新介護福祉全書』(分担執筆、メヂカルフレンド社)など。



福祉の専門家と聞いてどのようなイメージをもつだろうか。ある人は「行政の窓口で、福祉サービスの手続きをとる人」と言っていたが、一般の人々の福祉やその専門家のイメージもこれと大差はないのではないかと思う。しかし社会福祉士は社会生活を営むうえで困難をもつ人々の相談に応じ、助言や関係各所との連携を図ることがその役割とする国家資格である(表1)。このうち生活上の困難をもつ人の、その「困難」のありようや背景を専門家として理解したうえで解決を試みるという点で、心理学は重要な役割を果たす。社会福祉士国家試験において心理学関連の知識や理論が問われる理由はここにある。

そこで本稿では、社会福祉士の役割や国家試験のなかで、心理学がどのような役割を果たすのかを概観してみたい。

社会福祉士の専門性と活動

たとえば高齢になった夫婦二人暮らしの妻の性格が最近変わってきて、夫婦間でのささいな言い争いや行き違いが徐々に増えてきた場合を想定してみよう。この段階で、いきなり精神科を受診しようと思う高齢者は稀有であろうし、心理相談に訪ねてくる高齢者はさらに少ない。徐々に、妻の

料理のレパートリーが減り、時には同じメニューが連日食卓に並ぶことも増えてきた。掃除が不十分になり、身なりも気にしなくなって、夫は気持ちが塞いでゆく。社会福祉士は、多くが社会福祉施設や病院、地域の福祉関係事務所やセンター等に所属して、施設利用者や地域住民における潜在的な生活上の困難を見つけだし、援助を必要としている人の相談に応じ、アドバイスや助言を行うほか、解決に必要な援助を結びつける。例示した認知症の初期のケースでも、生活上の困難は、医療や福祉、心理などの多様な要因が複合して生じている。そこで社会福祉士は、戸惑う夫の心理を受け止めながら妻の状態を聞き取り、必要に応じて医療的な助言にとどまらず、必要なサービスや医療に関する情報の提供、その手続きについても支援してゆく。その目的は、この夫婦の権利擁護にある。つまり、この夫婦が本来もっている権利を本人たちに代わって表明したり、行使したりすることを通して、夫婦の相談援助を行うことが社会福祉士の大きな目的になる。

社会福祉士は1988年に誕生し、2010年2月時点で12万2421名が登録されている。同じく1988年に誕生した臨床心理士の登録者が2009年4月時点で1万9830名であることを考えると、少な

表1 社会福祉士の定義

「社会福祉士」とは、社会福祉士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、身体上若しくは精神上の障害があること又は環境上の理由により日常生活を営むのに支障がある者の福祉に関する相談に応じ、助言、指導、福祉サービスを提供する者又は医師その他の保健医療サービスを提供する者その他の関係者との連絡及び調整その他の援助を行うことを業とする者をいう。(社会福祉士及び介護福祉士法 第1章第2条より抜粋)

くとも数のうえでは、社会福祉士国家資格所有者が数倍多いことになる。ただし名称独占（資格を持たない者が、自分を社会福祉士と名乗ってはいけない）の国家資格であっても、業務独占（資格を持つ者だけしか、定められた業務をやってはいけない）ではないため、たとえば社会福祉士の資格を持たない人が社会福祉士と同様の役割を担っていることは多々ある。このため、それぞれの所属機関では社会福祉士という職名よりも、生活相談員、相談員、ケースワーカー、ソーシャルワーカー等の名称で働くことが一般的であるが、その職名にある者が必ずしも社会福祉士の国家資格を取得しているとは限らない。同じく業務独占ではない臨床心理士資格と大きく異なるのは、やはり名称独占であって、法律によって定められた国家資格である点である。近年では、高齢者の生活上の相談を総合的に受け付ける窓口となっている地域包括支援センターにおいて社会福祉士が必置とされたりするなど、未だ不十分とはいえ資格の社会的な認知も高まりつつある。またこれまでは機関に属して活動することが一般的であった社会福祉士だが、成年後見制度の広まりなどを背景に、個人が独立して相談を受ける独立型社会福祉士のあり方も模索されている。

社会福祉士国家試験における心理学関連問題の動向

社会福祉士国家試験は、年1回1月に実施され、毎年4万人以上が受験する。総出題数150問でマークシート方式によるものだが、合格率は30パーセントに満たず決して容易とはいえない。

表2に出題科目と出題数を示した。この表を見ると、社会福祉士に求められている要素がわかる。たとえば臨床心理士の認定試験における出題は、心理学一般の知識と臨床心理学に関する専門的な問題が出題されるが、社会福祉士の場合、医学や心理学、社会学、種々の法律や制度などの関連領域からの出題もあり、その範囲はきわめて広く、1領域でも無得点の場合は、不合格となる。相談援助という点では臨床心理士と共通の目標をもちながら、関連領域との連携それ自体がひとつの援助の方法とされている社会福祉士では、求められる知識も異なっていることがわかるだろう。ただ

表2 出題科目と出題数

科目		出題数
共通科目	人体の構造と機能及び疾病	7
	心理学理論と心理的支援	7
	社会学理論と社会システム	7
	現代社会と福祉	10
	地域福祉の理論と方法	10
	福祉行政と福祉計画	7
	社会保障	7
	低所得者に対する支援と生活保護制度	7
	保健医療サービス	7
	権利擁護と成年後見制度	7
専門科目	社会調査の基礎	7
	相談援助の基盤と専門職	7
	相談援助の理論と方法	21
	福祉サービスの組織と経営	7
	高齢者に対する支援と介護保険制度	10
	障害者に対する支援と障害者自立支援制度	7
	児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度	7
	就労支援サービス	4
更生保護制度	4	

し、表2に示した出題範囲がすべて出題されるにもかかわらず、資格取得ルートで最も主要な大学卒業ルートでの資格取得者においては、大学で履修要件として必ずしも心理学を履修する必要はない。法学、社会学、心理学のうちから1科目の履修でよいとされているからである。

心理学に関する問題は、かねてより精神保健福祉士（いわゆるPSW）との共通科目のひとつとされてきた。カリキュラム変更に伴い出題基準が変更になった2010年1月の試験からは、科目名は「心理学」から「心理学理論と心理的支援」に変更され、全出題数150問のうち従来10問だった出題は、7問と少なくなっている（表3）。その科目名称の変更が示すとおり、新カリキュラムでは単に心理学全般を網羅することよりも、社会福祉士における相談援助の実践に必要な心理学理論の理解と、心理的支援の方法と実際がより重視されるようになったといえるだろう。例えば同じ「内発的動機づけ」について問う質問でもその問われ方がより現実場面に即したものになっている。旧カリキュラムの第20回試験では、五つの選択肢から正しい記述を一つ選ぶ問題において「内発的動機づけによる行動は、その行動による外部からの報酬によってのみ強められる」という誤った選択肢の一つとして内発的動機づけが問われていた。しかし今年実施された第23回試験では内発的動機づけに基づく

表3 社会福祉士国家試験「心理学理論と心理的支援」の出題内容

出題基準 (新カリキュラム)	旧カリキュラム (旧科目名:心理学)					新カリキュラム	
	第18回 2005年度	第19回 2006年度	第20回 2007年度	第21回 2008年度	第22回 2009年度	第23回 2010年度	
人の心理的理解							
心と脳							
情動・情緒							
欲求・動機づけと行動			欲求・動機づけ	マズローの欲求階層説		日常生活と内発的動機づけ	
感覚・知覚・認知		錯視と選択的注意			日常生活と感覚・知覚		
学習・記憶・思考	学習と条件づけ	記憶概念 (作動記憶含む)		日常生活と記憶			
知能・創造性							
人格・性格				パーソナリティ理論	精神分析理論における力動論	シュブランガの類型論	
集団	帰属理論	社会的認知・行動	社会的認知・行動	PM理論 防衛機制	日常生活と社会的行動		
適応							
人と環境							
人の成長・発達と心理							
発達概念	発達理論 ピアジェ	愛着 高齢者の心理的特徴	生涯発達 発達障害	高齢期の心理的問題 乳幼児の発達	発達理論	乳幼児の発達	
日常生活と心の健康							
ストレスとストレッサー	ストレスとプラス ストレス	バーンアウト	ストレスと危機介入		ストレス	ストレス反応の実例	
心理的支援の方法と実際							
心理検査の概要	認知機能検査	心理検査の種類	心理尺度・統計法 心理検査	人格検査 高齢者の認知機能 検査	YG性格検査		
カウンセリングの 概念と範囲	要介護高齢者の家族 へのカウンセリング		高齢者の心理的 理解			カウンセリングの 介入法	
カウンセリングとソー シャルワークとの関係	コミュニティ心理学	福祉におけるセラピ ユーティックアクティ ビティ		障害児の家族支援			
心理療法の概要と実際 (心理専門職を含む)		家族療法	心理療法的特徴		心理療法的特徴	心理療法的特徴	
上記に分類できないもの	いじめ 自閉症	障害受容	被虐待児の認知・ 行動				

注：第21回以前は、旧カリキュラムによる出題。表では新カリキュラムの出題基準にあわせて再分類した。

行動に関する五つの選択肢から最も適切なものを一つ選ぶ問題が出題され、その選択肢は、「興味を持ったので、社会保障の勉強を始めた」というような具体的な行動内容が例示された。単に、教科書的に専門用語の定義を覚えていることよりも、日常に近い場面においてそれらの現象がどのように生じているかを理解することが、より重視されるようになったと考えられる。

社会福祉学と心理学の交点

ところで心理学からみた社会福祉と、社会福祉からみた心理学は、それぞれ実際のものとは異なるイメージをもたれているように感じる。たとえば筆者自身も、社会福祉領域にかかわるようになるまでは、社会福祉を心理学の近接領域とはまったく考えていなかったが、社会福祉士の資格を持つ人から「同じ援助職」と言われることに大きな違和感を覚えたものである。互いに、「援助」という言葉からイメージするものが異なるために生じる違和感である。

心理学という学問が、「心の科学」としての科学的客観性を基礎とするのに対し、社会福祉は先に社会という現実があり、その社会の中で生活する人間の役に立つという使命が第一義にある。たしかに臨床心理学においても役に立つことが求め

られるが、しかし心理学における実証的なものの見方を身につけた者が行う援助は、援助者自身も気づかないうちに、実証性を大切にされてきた基礎心理学の種々の理論や考え方が活用されている。刺激を統制して、自分が見たい要因を見ようとする姿勢は、心理学を志したものの本能のように、どの心理学の領域でも発揮される。被援助者に対して、共感的理解に努めつつも、他方で援助者と被援助者の関係性を冷静に観察・分析しようとする視点などは、心理学を学問の基礎にもつ者が、自ずと身につけた冷静さ・客観性ではないだろうか。他方、社会福祉学をその基礎にもつ援助者は、現実に生じる生活上の問題が、きわめて多様な原因が複合して生じていることをよく承知している。日常生活で生じる問題は、まさに社会福祉士の出題基準で示したような種々の要因が絡まって生じている。この絡み合った要因をアセスメントし、現実という制約の中で可能な援助を見つけだし、現実と折り合うことを支援することを社会福祉学は得意とするのである。このように学問の端緒のちがいが時には互いの専門性を否定しあうような不毛な関係を招いてしまうことにもつながる。

このような齟齬を理解するために、先に示した、認知症を発症した妻を介護する夫への援助を考えてみたい。この夫は、彼自身も自分の生涯発達の

中で、まさにエリクソンのいう「人生の統合」という課題に直面している高齢者のひとりであり、現実的には妻の認知症という喪失体験をワークスルーするプロセスで自分の人生をまとめる作業に向き合うことになるだろうと心理学者である筆者はまず考える。そして介護する夫が、状況をどのように認知しているかを常に意識しながら、援助を組み立てようとする。しかし社会福祉を専門とする援助者は、この認知症の妻と夫が置かれた社会環境をアセスメントし、彼らの助けとなりうる資源を見つけだし、実際に助けとなるように働きかける。認知症の疑いにいち早く気づいて、援助者もつ社会資源に関する情報を夫に提供したり、場合によっては病院の受診の方法や介護サービスの利用の仕方も伝えたりする。同時に、この夫婦の経済状況や人間関係をアセスメントして、夫妻の今後の生活全般を視野に入れて支援を組み立てるだろう。

現実には、どちらの援助も偏れば役に立たなくなる。介護する夫の喪失体験を重視し、ワークスルーすることばかりに目が向くと、妻の認知症の症状緩和や介護に伴う夫の介護ストレスの緩和という現実的な援助がおろそかになり、ストレスのあまり夫はワークスルーに必要な情緒的資源も枯渇して破綻してしまうかもしれない。しかし夫の内的体験を軽んじて、現実的な援助ばかりに目が向きすぎると、たとえば認知症の介護者は一般的にストレスが高いからと援助者が先走って介護サービス利用を推し進めたりすると、介護のストレスは減っても、夫は妻を介護できなかったという自責の念からさらに喪失感を深めるかもしれない。極端な例ではあるが、とかく臨床心理士は前者、社会福祉士は後者のような援助に陥りがちである。そして両者が互いに幻滅しあうことにつながってしまうのである。

現実には起きている問題の解決には、心理学的援助だけでも、社会福祉的援助だけでも不十分であるのは言うまでもない。社会福祉士国家試験の中で、心理学が問われるのは、心理学の基本的な考え方を知り、社会福祉学と心理学の交点を見つけて社会福祉士に求められているからではないだろうか。

社会の中での心理学のこれから

このような意味において、心理学は、心理学だけのものではない。心理学は人にかかわる場面のいたるところで必要とされるし、今後も社会で役立つ可能性は大いにあると筆者は考える。社会福祉士における心理学の位置づけにみられるように、より現実に即した形で心理学が活かされるためには、心理学と近接領域もしくは基礎理論と日常場面をつなぐ、そのバウンダリーな部分を説明しうる研究や、わかりやすい説明そのものが必要である。しかしその一方で、バウンダリーな部分を他者に説明するためには、心理学の基礎や専門性について、とくに現場に出ようとする人はしっかりと追求することが求められる。心理学を基礎とする専門職は、社会から、とくに社会福祉の現場から必要とされているに違いない。しかし、実験室や面接室を出た現実社会で起きる問題の原因は、心理学的な要因以外の要因も含めきわめて複雑に絡み合っている。そのような現実に直面したときに、心理学という基礎をなにかば否定する形で社会福祉的援助に価値を置きすぎると、自らのアイデンティティを否定するばかりではなく、真に心理学的な援助を求めている被援助者を見捨てることになる。かといって心理学という専門性に固執しすぎてしまうと、社会の中で役割を見出せなくなる。心理学を志す者の宿命として、専門性の追求と他領域との架け橋づくりは常にジレンマとして抱えなければならないのだろう。社会の中で心理学が今後も必要とされるためにも、このジレンマを抱え続ける覚悟が、今の心理学に問われているような気がしてならない。

文献

- Erikson, E. H., Erikson, J. M. & Kivnick, H. Q. (1986) *Vital involvement in old age*. New York : Norton. [E.H.エリクソン・J.M.エリクソン・H.Q.キヴニック/朝長正徳・朝長梨枝子(訳)(1998)『老年期：生き生きしたかかわりあい』新装版、みすず書房]
- (財)社会福祉振興・試験センター(2010)社会福祉士・介護福祉士・精神保健福祉士国家試験出題基準・合格基準
- (財)社会福祉振興・試験センター(2007～2011)第19～23回社会福祉士試験問題